

《県営かんがい排水事業》

読谷村 西部連道地区

地区の概要

読谷村は、沖縄本島中部の西側にあり、東支那海に突き出た残波岬を有する。また、後世に残るような文化が多く在り、読谷山花織や『やちむんの里』としても広く知られる。

当該地区は、昭和55年に農業振興地域に指定され、同年から土地改良総合整備事業によって面整備された『西部連道地区』に、かんがい排水事業として受益面積79.0ヘクタール、事業費7億6,420万円により、平成5年度～9年度にかけてかんがい排水施設を整備した地区である。



西部連道地区位置図

水有り農業への道のり

農業を営むにおいて、大規模での効率の良い営農が、一個人農家の収入増だけでなく、その地域の農業の発展に繋がることは容易に想像できる。読谷村でも昭和50年から農業振興地域を指定し、農業基盤の整備が行われた。その結果、当地区でも機械が汎用化、大型化し、省力化に繋がった(図-1)。

しかし、土壌は琉球石灰岩の島尻マージ地帯で保水力に乏しく、ほ場が集約され大きくなっても、干ばつ被害には対処できない。さらには、品質向上や高価作物への転換が図れず、面整備だけでは地域の農業発展には課題が残っていた。

更なる向上～水を求めて～

県では、面整備と同時に水源確保のため、ダムを整備を進めた。そうして村、農家あげて打ち出し、平成7年に完成したのが長浜ダムであり、地区の水をすべて担っている。このような整備が行われたあとの地区の作付け状況は、サトウキビが半分近くまで減り、芋類や特に花卉の著しい作付増加が見られる(図-2)。

同時に事業後の農家所得をみても整備前の約七倍と、整備による営農の効率化、高品質化がみてとれる(図3)。

図-1 農業機械の大型化

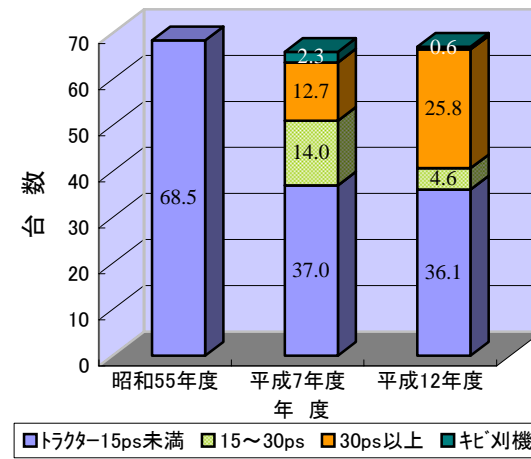


図-2 作物経営多角化

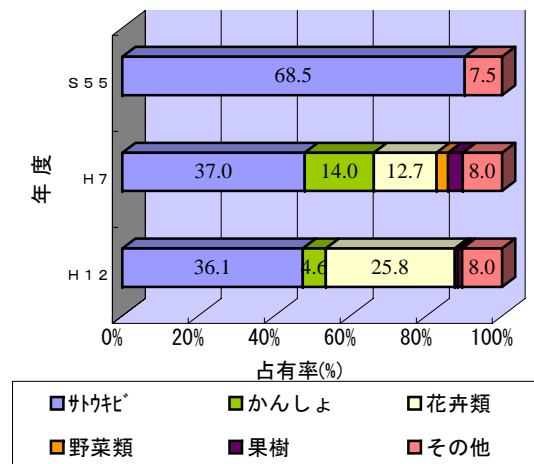
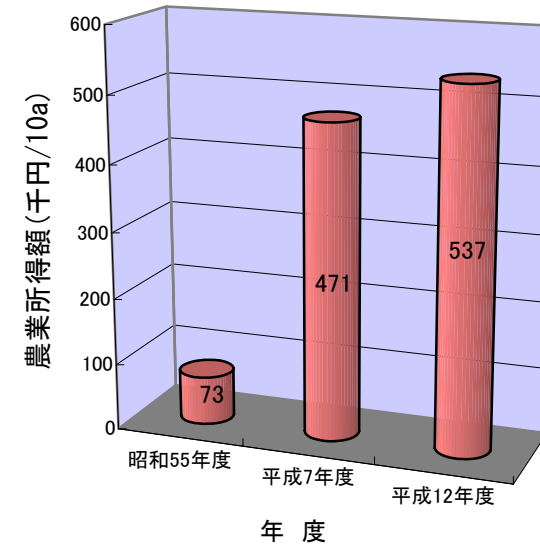


図-3 事業前後の所得比較



これからの農業を考えて

当該地区では、事業実施前はほとんどがサトウキビであった。それが実施後の作物転換によってサトウキビの半数近くが他のより高価な作物へと転換した。例えば、キャベツや茄子等の野菜、メロン、紅芋、特に菊は、この地区での特産品となりうるほどに成長し定着している。

しかし、新たな問題も浮上している。一つには、水の普及で作物の混在化が進み、栽培体系の違いからくる営農上の問題があげられる。主として、散水作業上で、隣接地主同士の調整が必要といったことであるが、今後、作物の集団化の検討が望まれる。

また、効率化を優先するために、連作や土地利用の頻度が高くなることで、知力が低下することから、農薬や化学肥料の投入が増えている。

他にも人的問題も大きい。生産基盤の安定は以前に比べ専業農家の安定化や、後継者の育成を促進しているものの、まだまだ農業人口は高齢化し、後継者も不足している。この地域の産業別人口は増加傾向にあるものの、農業人口は減少傾向にある。

住み良い農村環境づくりと、魅力ある作物の地域生産を目指し、担い手の育成や、作物集団化等によるさらに効率の良い、地域に根ざした魅力ある農業の確率に取り組んでいきたいものである。

事業実施の効果

- このように、事業実施後の経過として
- ①機械導入による省力化
 - ②農地の集約化による省力化・効率化
 - ③適正な水管理による作物の品質向上及び安定供給
 - ④作物選択の拡大
 - ⑤塩害防止
- 等の様々な効果が発現する。(写真①～③)



写真① 電照菊栽培



写真② キャベツの水耕栽培



写真③ スプリンクラーによる散水